
New Age Beginning

淡太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

New Age Beginning

【Nコード】

N4959S

【作者名】

淡太郎

【あらすじ】

もし、あなたが常識の枠を覆す出来事に遭遇したらどう対処し行動しますか？

それはあなたにとって困難なことですか、それとも素敵なことですか。

そんな出来事に直面している男の物語を紹介いたします。

そこに少しばかりSFというエッセンスを加えております。

—gooblog「淡太郎の部屋／awataro's room light」（英文）にも掲載中—

第一章・侵略組曲（1）（前書き）

喧騒とした慌しい日常よりほんの少しだけ現実を忘れ、自由に想像を膨らませ空想の部屋へお越し下さい。お付き合いいただけるひとときの間、あなた様はどのような夢を見ていただけますでしょうか。

第一章・侵略組曲（1）

今日もどんよりとした鉛色の雲が空一面を覆いその重たい雰囲気のなか、あたかも我慢できなかつたように大粒の雨が降り続けている。雲の中からは、ごろごろと恐怖感を募らせる音が鳴り響き、その都度けたたましい音とともに稲妻の閃光が走り空を切り裂く。容赦なく降り続いているこの大雨は休むことなく一ヶ月以上となる。気象庁の発表によると今年の梅雨は全国的に異常なほど降水量が高いという。そんな激しい雨のなか二人の男を乗せた新幹線は東京に向かって猛スピードで走っていた。

人かず少ない自由席の一番最後の座席に隣りあわせて腰をかけこれといった会話も交わすこともなく、二人の間にはただ時間と窓から見える景色だけが流れていた。窓際に座る男はデニム姿で足を組み、窓を眺めたただ何気に雨に濡れる景色に目を向けていた。通路際に座る男はくたびれた背広姿で俯き、何かにおびえる様に体を震わせていた。二人とも無言で喋りだす様子もなく一見してみれば、ただ合席に座った赤の他人のように見える。しかし共通していえるのは二人とも砂ぼこりのついた薄汚れた格好だということだ。

そんな静寂を突き崩すように窓際の男に動きがあった。彼はおもむろに胸ポケットから煙草を取り出し一本くわえ火を点けた。土砂降りの雨に浮かぶ景色に虚ろな視線を向けゆっくりと煙を吐き出した。

「雨やまないよなあ」

窓際の男が再び静寂を破り口を開いた。そのつぶやいた言葉は、その男にとって雨が止もうが止ままいがどちらでもよいことであって特に問題ではない。無意識にぽつりと出たのであろう。

「止む気配さえないな」

煙を吐き出しながらつぶやいた。どうやら無意識でなく隣に座る通路際の男を意識しながらつぶやいている様子だ。

「こんな天気じゃこつちまで嫌になつてくるよなあ」

煙草を吸いながらつぶやいている。その間隣に座る通路際の男は微動だにせず、俯き屈み込んだままにいる。

「いまどの辺りだ」

窓際の男は窓に顔を近づけ覗き込んだ。

「ぜんぜん分からん」

目を凝らしてよく見たが流れいく雨に濡れた灰色の景色からは、今どの辺りを走っているのかうかがい知る術はなかった。やがて窓際の男の視線は、窓に映る隣に座る通路際の男の姿に向けられた。その男は俯き黙ったままで先ほどと一向に変わっていない。そんな姿を虚ろな目で見ながら短くなった煙草を吸い干して大きく吐き出した。煙は窓のなかに映る通路際の男をめぐりかき消した。そして火種がフィルター近くまでにきている煙草を灰皿にもみ消し、隣に座る通路際の男のほうへ姿勢を変えた。

「もうすぐ東京だ」・・・つづく

第一章・侵略組曲（2）（前書き）

前回のあらすじ・・・二人の男を乗せ新幹線は猛スピードで走っていた。二人の男の関係は・・・？そして目的は・・・？

第一章・侵略組曲（2）

窓際の男は俯き屈み込んだままにいる通路際の男に虚ろな目を向け、小声で言った。期待はしていなかったが反応は無かった。

「いまどこを走っているのか分からないが、あれからかれこれ三時間にはなる。もうそろそろ着いてもいい頃だろう」

まったくなんの反応も無いのに心細くなってきた。

「しかし雨よく降るよなあ。稲光までしているぞ」

通路際の男は黙ったままにいる。俯いた姿勢を崩さず微動だにしない。そんな姿を見ては、だんだんと自信なさげになってきた。

会話にならず独り喋っているのが嫌になったのか、窓際の男は再び窓に流れいく雨に濡れた景色に虚ろな目を向け、肘をついた。

雷光が走り、強い雨が容赦なく窓を打ちつける。一向に変わらない外の天候を何気に見ながらふと思った。

「真っ暗だ」

時折の雷光で一瞬明るくはなるが何も無い闇の世界が広がっていた。いままで見ていた鉛色がかった景色がもうそこには無かった。その闇の世界に土砂降りの雨が降る。自分が乗っている新幹線を一步出れば一寸先も見えない嵐のなかと思うと背筋が寒くなった。

「までよ・・・」

一筋の雷光が走りまたふと思った。

「俺たちはどこからこの新幹線に乗ったんだ。隣に座っている男は何者だ・・・」

肘をついたまま横目で通路際の男を見た。

「いままで何をしていたんだ。なぜ東京に向かっている」

あらゆる疑問が脳裏を掠めていく。自分が誰なのかも分からなくなり、頭のなかが混乱してきた頃、現実に戻されるように通路際の男が口を開いた。

「熱いコーヒーをくれないか」

その言葉に驚いて反射的に振り向いた。

「熱いコーヒーを……。ミルクも砂糖もいれないで……」

通路際の男は今までと同じ俯いた体勢でか細く言った。……つつく

第一章・侵略組曲（3）

「ああ・・・分かった」

拍子抜けた返事になった。窓際の男は立ち上がり隣に座る通路際の男をまたぎ通路へと出た。その時遠く離れた自動ドアの扉が開きワゴンサービスが入ってきた。ウェイトレスは軽くお辞儀をしてワゴンを押して歩いてくる。

「丁度よかった」

窓際の男は彼女を呼んだ。

「ホットコーヒーをくれないか。ブラックでふたつ」

学生のアルバイトだろうか、まだ幼い顔をしている。ウェイトレスは無邪気な笑みを浮かべ、弁当やおかしが並んだワゴンの蓋を開けそして思いもかけない物を取り出した。

「えっ！」

窓際の男はぎよとした。

「何をしているのかな・・・。僕はホットコーヒーを注文したんだよ」

窓際の男の体は硬直している。

そのウェイトレスは無邪気な笑みを浮かべたままピストルの銃口を窓際の男に向けていた。

「からかわないでくれ！何の冗談だ」

言葉が震えていた。

「コーヒーなんて飲んでいる時間なんてないわ。さようなら」

幼い顔のわりには低い声だ。

ウェイトレスは無邪気な笑みを浮かべたままピストルの引き金を引いた。鈍い衝撃音とともに銃口から火を噴いた。銃弾は一直線に窓際の男の心臓を貫いた。

「山崎・・・」

崩れ倒れた窓際の男のとっさに出た言葉だった。

薄れいく意識のなか通路際の男のほうへ視線を向けた。しかしそこには誰も座ってはいなかった。次第に視界が狭まり意識が遠のいていった。

「ありがとうございます」

ウェイトレスは無邪気な笑みを浮かべワゴンをもと来た方向へとまわし歩いていった。

そこには通路に倒れた窓際の男だけが残され、何もなかったように窓には闇のなかから激しい雨がただ叩きつけているだけだった。

男はベッドから飛び起きた。

そこはいつも見る薄暗い部屋の中だった。部屋中を広がる独特の薬の匂いがつんと鼻にくる。

「またあの夢か・・・」

体じゅうにじっとりとした汗をかいていたが、もう一度横になりそのまま深い眠りに落ちていった。・・・つづく

第一章・侵略組曲（4）

今日も朝の日差しが眩しい。夢のなかの天気と違って雲ひとつない空が毎日続いている。

今年は空っ梅雨だ。

男は大きく背伸びをしてベッドから上半身だけ起き上がり、すぐ横にある窓から中庭の景色を眺めた。中庭の周り全体は常緑樹が生い茂り鮮やかな緑を醸しだしている。地面には芝生が敷き詰められ、その中央には何かのオブジェを象った大きな噴水があり勢いよく水を噴き上げている。そこには朝の新鮮な空気を吸いに出てきているのか数人の患者の姿も見受けられた。

ベンチに座り新聞を読む者、芝生の上に寝そべる者、ただ散歩する者とさまざまだが思い思いの時間を過ごしている。

体を癒すにはもってこいの環境だ。

つくづくそう思った。窓から見える自然の緑に心を和ませ静かに時間が経つのを楽しんでいるとそこに聞きなれた明るい声が部屋へ入ってきた。

「おはようございます。あら、また嫌な夢みたのですか？」

いつもの看護婦がえくぼをつくっていた。

「なぜ分かる？」

「パジャマが汗でびしょびしょ」

あの嫌な夢をみた朝は目覚めが悪い。それが汗で湿ったパジャマの所為だと思うと納得する。

「この検温が終わったら早くシャワーを浴びてらっしゃい」
そう言って体温計を渡した。

「新しいパジャマも置いておきますからね」

汗で冷え切った体に浴びる熱いシャワーほど気持ちよいものはない。じめつとした感触がその勢いよく出るお湯によって流され爽快感が

よみがえってくる。

新しいパジャマに着替え中庭にでて芝生に備え付けられているいつものベンチに腰をかけ、たばこに火をつけ思いにふける。いまのところそれが日課になっている。そんな繰り返し続けられる日々がもう一ヶ月にもなる。たばこを吹かし緑一色に包まれた木立を何気に見ながら、ふと今までの自分の人生を振り返った。

男の名前は板倉一郎、歳は三十歳。大手企業のビジネスマンとして第一線で活躍していたのだが、これからという時に過労で倒れこの小高い丘にある病院に運ばれた。当初気を失い気がついたときにはベッドの上だった。それから何日もしないうちに薄い封筒が会社から送られてきてリストラされた。仕事を生きがいにしてきた自分としてみれば大変ショックだった。また会社からみれば利用価値がなくなればいらぬ存在になる。ただ過酷な競争に敗れ使い捨ての駒として扱われただけだった。

「不運な末路だ」

口からぼそとでた。入院して以来ひとりも見舞いにも来てはいない。

気がつくとも中央のオブジェの噴水を何気に眺めていた。止め処なく噴出している大量の水が今までのことを洗い流してくれるような思いを心によせた。

「たばこどこまで吸っているんですか」

いつもの愛らしいえくぼの看護婦が横から急に顔を出した。

「あちっ！」

たばこの灰が長く垂れ下がって火種がフィルターまでできていた。

「たばこやめてくれるって約束しませんでした？」

彼女の名前は遠藤広子、歳は二十六歳。担当看護婦として板倉の面倒をみている。

「あの日はやめたのだよ」

「一日やめただけじゃ駄目です。ずっと続けなくちゃ」

彼女の顔からえくぼが消えていた。少し怒っているようだ。

「明日からやめます・・・」

それからひと時たわいもない世間話をした。

板倉の入院しているこの病院は都会の雑踏を離れた山のなかにある。古い教会を改装したのか総合受付になる玄関は高く伸びた時計塔となっている。天辺には大きなチャペルの鐘が吊り下がり一時間ごとに鳴り時を知らせる。その入り口からなかに入ると真正面に縦長の大きな聖母マリアのステンドグラスがはめ込んで在り、来る者の心を落ち着かせてくれる。

その先は四本の渡り廊下が扇状に延びてあり各専門の棟へと繋がっている。そのひとつのリハビリセンターに板倉はいる。

遠藤と別れたあと、ぽかぽかとした気持ちのよい暖かい日差しに包まれ、ついうとうとそのままベンチで転寝をした。

「コーヒー・・・」

「えっ！」

気がつけばまた新幹線の中にいた。・・・つづく

第一章・侵略組曲（5）

「熱いコーヒー・・・買ってきてくれないか・・・。ミルクも砂糖も入れないで・・・」

またいつもと同じ場面だ！ひと気の少ない自由席車両の一番最後の座席に座り、窓には激しい雨が叩きつけられ、隣の座席には山崎という名の男が肩を落として座っている。

いきなりのその状況に驚いてしまい窓際の男である板倉は拍子抜けした返事をした。

「ああ・・・分かった・・・」

そう言うといつものように屈みこんで座る山崎の前を跨ぎ通路へと出た。

変わることなく幾度も同じ動作が繰り返される。

「温かいの買ってくるから待っているよ」

そういうと服に付いている砂ぼこりを叩き目の前の自動ドアに向かった。

その時・・・。

「有沢！そっちじゃない！」

突然山崎が怒鳴った。それに驚き反射的に振り返ると何かを訴えかけるような眼差しで睨みつけていた。

「ああ・・・そうだったな・・・」

山崎のその鋭い視線と表情に恐れおののき思わず一步あとずさった。そしてその時初めて自分の名前が有沢ということを知った。

「じゃ、買ってくるよ・・・」

ぎこちない返事で山崎を促し進行方向へと足をかえた。

頭のなかではあらゆる疑問が渦巻いている。自分自身が何者であるのか。あの山崎とどういう関係があるのか。何故先ほどの方向ではいけないのだろうか。あの男は何を隠しているのだろうか。ましてや新幹線の中にいる自体不思議でならなかった。訳のわからないまま、

もややとした気持ちの悪いものを感じた。そんなわだかまりの残るなか、ゆっくりと空席が目立つ座席を見渡しながら歩き出した。そこには数名の乗客が一定の間隔をあけ座っていた。

ビジネススーツで身を包みノートパソコンをしきりに打つ青年。くたびれたジャケットを無造作にはおりいびきをかいて眠る中年男。駅弁を一心不乱にむさぼる老婆。誰しもが自分のテリトリーを守っているような感じだった。そこへ電子音の音が入りその方向を覗いてみた。そこには野球帽を深くかぶった小学生くらいの少年が一人で静かにゲームをしていた。

「ここはいったいどこなんだ・・・」

穏やかに時が経つ。有沢という名の自分。脈絡のない新幹線の中という場面。目的さえも分からない。ようやく車両を結ぶ自動ドアの前まで来た。自分のいた座席からここまでかなりの時間がかかったような気がする。そこから車両全体を眺めてみた。立っている足元にはいま歩いてきた通路が長く延びており、その両側には空席の目立つ座席が通路に沿って並んでいる。まぶたを閉じればこの空間と同化して深い眠りに落ちてゆく・・・。そんな錯覚さえ覚える。目を閉じてその時間が止まったような空間を全身で味わっていると、不意に背を向けていた後ろの自動ドアがゆっくりと開いた気配がした。

「うっ・・・」

小さな熱いものが背中から体の中へ物凄いスピードで貫いていった。体が徐々に重くなっていく。目の前に地面が近づいてくる。体中に激しい痛みを感じ長く伸びる通路にスローモーションをかけたようにゆっくりと倒れこんだ。背中から胸へと開いた傷口からは赤いどろどろとした血が通路を染めていった。ゆっくりと首を後ろに回し背後に立つ者を見上げた。

そこには銃口から煙の出たピストルを手にしたあのウェイトレスが微笑みながら見下ろしていた。

「残念ね、ここまで来て。もう少しだったのに」・・・つづく

第一章・侵略組曲（6）

「なんのことだ・・・」

その言葉を言うのが精一杯だった。呼吸をするのが辛くなってきた。
いる。

「・・・・・・・・・・」

ウェイトレスは笑いながら何かを言ったが聞き取ることができなかった。

しきりにくる激痛を抑え山崎のいる座席に視線を変え這いずって行った。しかし体から出た血が滑り思うように進めないが這い蹲りながら前へ進んでいった。這いずる有沢の後にはまるで大きなナメクジが歩いた後のように赤い血が尾を引いていた。

「もう少しだ！」

自分を励ますように声にして言った。

ほかの乗客たちは有沢のその行動を無視するかのように見知らぬ顔で今さっきと同じ動作を繰り返している。

こいつら・・・こういう神経しているんだ・・・。涙を流しながら乗客たちの顔を見上げた。

ノートパソコンとにらめっこしている者。高いいびきを掻いてぐーすか熟睡に耽る奴。ごはんを一口ずつ味わって食べる婆さん。誰しもが皆お構いなしの雰囲気だ。

唇をかみ締め涙を呑み、ようやく自分がいた座席までたどり着いた。涙でぼやける視線の向こうには座席に座る山崎の足が見える。血まみれの右手を大きく伸ばし見上げた。

「山崎・・・」

そこには冷たく青ざめた山崎の姿があった。その変わり果てた姿に愕然となり、伸ばした右手が力尽き落ちた。

「どうして・・・誰がこんなことを・・・」

悔しい思いを感じた。体じゅうの力を振り絞りここまでたどり着い

たというのに……。血まみれの両手にこぶしをつくり通路を叩いた。止め処となく涙があふれ出る。やがて小さな影が自分の前に立っていることに気がついた。小さな運動靴が目に入る。見上げていくと次に半ズボンを履いた幼い足がみえる。そこには半そでシャツを着て野球帽を深くかぶった先ほど電子ゲームをしていた少年が立っていた。

「僕だよ、おじちゃん」

有沢はその少年の顔をまじまじと見た。

「き！君は・・・！」

目がかすみ意識が薄れてきた。急に社内を照らしていた照明が点滅しはじめ、頭のなかではざわめいた落ち着きのない雑音が鳴り響いてきた。そのうち照明が消え有沢の意識とその車内は暗闇に包まれた。

ベッドから身を起こしうなだれている板倉がいた。パジャマがまわりつくぐらい体いっぱい嫌な汗を掻き肩で息をしている。鼓動を早く打つ音だけが大きく響いている。時計は午前三時を指し、薬の匂いが充満するいつもと変わらぬ薄暗い自分の病室だった。

「のどが渴いた」・・・つづく

第一章・侵略組曲（7）

極度ののどの渴きをおぼえ、ゆっくりとベッドから立ち上がった。汗を含んだパジャマがべつとりと体に付着する。半分脱水症状を起こしているのか、ふらふらと廊下に出た。冷水機のある方向へと意識もうろうになりながら歩いていく。たどり着くと同時にスイッチを押し冷水をがぶ飲みした。冷たい水がのどを潤す。のどの渴きが満たされるとそばにあった長いすに腰を搔け放心状態になった。そして物思いに耽った。

有沢という名のもう一人の自分。あの新幹線での出来事。物に触れる感触も伝わっているし、目に見たものも鮮明に覚えている。これが夢というものの成せる業なのだろうか。考えることは夢のことばかりである。

あの少年は誰なんだ……。彼を知っていた……。山崎との深い繋がり。そして命を狙うウェイトレスに他の乗客たち。関わってくる夢のなかの登場人物は有沢という名の自分にどういう影響を与えているんだ。

答えが出てこない。だんだんと頭が痛くなってきた。俯き両手の中指でこめかみを押さえる。

それにこの夢は日を増すごとに少しずつ変化している。同じ繰り返しじゃない。しかしその先が見えない。もう少しのところで夢から覚める。あの車両の次には何があるんだ。

まぶたを閉じこめかみを撫ぜた。

この夢を見だしたのは病院に入院してからだ。ここに来てから何日経つだろう。あれから……。あれから……。まてよこの病院に来る前は何をしていたんだ……。そうだ会社に勤めていたんだ。なんの会社だ……。そこで何をしていた……。過労で倒れた……。それはここへ来てから聞いた話だ。誰に聞いた。遠藤広子……。夢のことから現実のはなしに切り替わる。頭痛がひどくなる。両手

で頭を押さえた。

体を休め回復するためにこのリハビリの棟にいる。病に冒されたわけではない。なのに何故いつも部屋には薬の匂いがするんだ。そして今日は昼にもならない時間にベンチの上で寝込んでしまったはずだ。あれから何時間経っているんだ。

両手で髪の毛を握る。夢のなかの自分も現実の自分も存在が分からなくなってきた。ましてや何故ここにいるのかも思い出そうとしても思い出せない。曖昧な記憶だけが脳裏をかすめる。

誰が部屋のベッドまで運んだのだろうか？

遠藤広子の顔が頭に浮かぶ。少し頭痛も治まり首を後ろにもたげ天井を見上げた。

たぶんそうだろう……。ひろちゃんか……。器量よしのえくぼのかわいい看護婦さん。まてよ……。病院関係者は彼女しか知らないし、他に会ってもいない。なぜだ……。専属の看護婦とはいっていたがそれにしておかしい。医者もひとり顔を見せてもいいはずだ。分からない……。頭のなかかもやもやする。明日相談してみることにしよう……。

まぶたを閉じ体の力を抜く。そしてそのまま深い眠りについていった。それからどれだけの時間が過ぎただろう。汗を掻いたまま寝た所為か、ぞくつとした寒気を感じ身震いして目が覚めた。するとそこには大きな黒い人影が目の前に立っていた。……。つづく

第一章・侵略組曲（8）

うつすらと夜が明けていく。窓からは初夏を感じさせる日差しが入ってくる。今日も一日気持ちのよい天気になりそうだ。しかし・・・、板倉の病室には彼の姿はなかった。

「投身自殺ですか・・・」

「はい・・・今日未明のことです・・・」

「なぜそんなことに・・・」

「原因は詳しくは分かりませんがノイローゼではないかと・・・」

「残念なことです・・・。しかし起こってしまったことは仕方ありません。私たちはやれるだけのことは尽くしました。悲しい知らせになります。ご家族の方に連絡を入れてください」

「それが・・・親族や身内の方はいらしゃらないみたいで・・・」

「まあそれでは仕方ありません。こちらで対処いたしましょう」

「はい・・・分かりました。では早速手配しておきます・・・」

「それから遠藤さん。急なことで大変かもしれないけれど気を落とさないでね」

「ありがとうございます・・・院長」

そして遠藤広子は院長室を後にした。院長室の部屋の中には一人こげ茶色の革製の椅子に腰をかけたまま、悲しげな顔を両手で覆い机の上に両肘をつき俯く院長がいた。しかしその表情は暗い悲痛の面影から妖しげな笑みへと姿を変えた。幼い顔をゆっくりとあげ低い声で笑い声を高々と響かせた。

高く聳え立つ病院の上空にはいままで晴れ上がった青空を覆い隠すように、鉛色の雲が静かに忍び寄り一雨ずつ激しく大地に降りつけていった。それは瞬く間に土砂降りの雨となり梅雨の始まりとなった。またそれは混迷する人類の、晴れ間の見えない暗雲漂う湿った梅雨の始まりだった。・・・第一章おわり

第一章・侵略組曲（8）（後書き）

誰しもが一度は興味を持つ未知の世界、恐怖を感じながらその好奇心を駆り立てる。ただ空想のお話で止まらず自分自身に置き換えたらどうだろう。「次は我が身！」想像力を膨らませ、話の展開に没頭し、登場人物と一緒に物語のなかに同化していく。次回もこの部屋でお待ちしております。

第二章・種の絶滅(1) (前書き)

喧騒とした慌しい日常よりほんの少しだけ現実を忘れ、自由に想像を膨らませ空想の部屋へお越し下さい。お付き合いいただけるひと
ときの間、あなた様はどのような夢を見ていただけますでしょうか。

第二章・種の絶滅（1）

漆黒の闇の中。それは見上げるほどの鬱蒼とした高い樹木が生い茂る森と一体にその存在を消すかのようにひっそりと姿を佇まさせていた。その周りには人の背丈ほどある雑草が敷き詰めて長い蔭が伸び、その姿を覆い尽くしている。長年の年月が偶然そうさせたのか、それとも故意にしたのか。まるで人目を避け見つかってはいけないかのように……。だが大きな満月が雲からゆっくり顔を出す夏の蒸し暑い夜、四人の若者たちによってその沈黙は破られた。

「やっと見つけたよ」

「本当に在ったのね」

「なんか不気味だよな」

「やだ・・帰ろうかしら」

彼らの前には廃墟と化した大きな建物が聳え立っていた。彼らの視線はその建物に目を逸らすことなく集中していた。

「見事なもんだな」

「怖いわ・・」

「私たちが見つけたのよね」

「じゃ、入ってみようぜ」

物音のない静寂の空気が包みこんでいた。ゆっくりと生暖かい空気が吹き出したころ彼らの持った懐中電灯の光が揺れ動きだした。四人は自分の背丈まである雑草を掻き分け廃墟の建物に向かって歩き出した。

「やっぱりやめましょ。私怖いわ」

そう言って望恵は立ち止まった。

「なに言ってるんだ、ここまできて。ようやく幻の心霊スポットを見つけたんだぜ」

悟がじれったそうに言った。

「入らず帰るなんて勿体ないぜ」

孝広がけし掛けた。

「もう、臆病なんだから」

良子があざ笑った。

蒸し暑い夏の夜。誰も知らない森のなか四人の声だけが響いていた。彼らの前にはまるで彼らを待ち構えているかのようにそれはじつと静かに建っていた。

四人ともじめっとした汗を体中に搔いていた。それは熱帯夜の所為かそれとも今から向かう幽霊屋敷に興奮しているためか、いずれにせよ彼らの胸は高鳴っていた。

一歩一歩と四人が持つ懐中電灯の光が揺れその廃墟に近づいていった。彼らを待ち受ける恐怖が口を開けて待っているとは知らずに・・・
・・・つづく

第二章・種の絶滅（2）

一見植物の蔦が建物全体を包み隠し覆っているため分かりづらいが、間近で見るとその姿は想像以上に不気味を呈していた。玄関扉には無造作に張り合わされた板が招かざる訪問者を硬く閉ざし、壁は所々崩れ落ち鉄骨の骨組みが曝け出し、窓の硝子はすべて割れておりそこから誰か覗いてるような恐怖さえ感じる。彼らはまだ見えないおぞましき魍魎魍魎と対面することも知らずに玄関の前まで来た。

「さあ、どうやって入ろうか」

孝広が蔦を掻き分けバリケードになっている板を眺めた。

「こうやって入るんだよ」

悟が乱暴にその板を壊していった。長年の年月が経っているため腐食した板はすぐに崩れ落ちバリケードの役には立たなかった。うるさいぐらいの音が森じゅうに響いた。

「そんな事しちゃ崇られそうだわ」

望恵が怖々と怯えている。

「迷信深いわね。これで封印は解かれたわけね」

良子は興味心身だ。

顔を出した玄関の扉には赤いペンキで“立入禁止”と走り書きされていた。その文字は今の状況にぴったり当てはまり四人を盛り上げた。

「さて誰から先に入る」

「私は嫌よ」

「記念すべき一歩だぜ」

「だったら早くは入りなさいよ」

数分そんな押し問答が続き四人一緒にそろってノブを開くことにした。中から冷たい空気が四人に吹き付ける。体じゅうのじめつとした汗が急にぞくとさせる。四人はゆっくりとその闇の中に吞まれていった。かび臭い匂いが鼻を吐く。なかに入るとほこりとくもの

巢が覆う大広間になっていた。暗闇に月の光が差し込むだけで薄暗くどうなっているか全体を把握できない。四人は恐る恐る懐中電灯の光を思い思いの方向へと向けた。そこは多くの人が集まるような場所だった。しかし腰をかける長いすは散乱し倒されていた。彼らは恐怖に駆られながら一步一步奥へと入っていった。

「ここはいったいどうゆう所だったの」

「噂によると精神病院だったらしいぜ」

「俺は秘密の研究施設と聞いたぜ」

「どっちにしてもただの噂ね……。ここは教会よ」

良子の照らした懐中電灯の光の向こうにはステンド硝子で彩られ、ほこりにまみれた聖母マリアがいた。その上には傾いた十字架が悲しげに彼らを見下ろしていた。……つづく

第二章・種の絶滅(3)

「ね！これみてよ！！」

三人から少し離れた望恵が大きな声を出して皆を呼んだ。

「19・・・年、6月・・・。私たちが生まれるずっと以前じゃない！」

そこには色あせ破れたカレンダーがぶら下がっていた。その下にはダイヤル式の赤い公衆電話がほこりで真っ白になっていた。

「うわっ、年代物だな。」

「こんな電話初めて見たわ」

「しかし教会にカレンダーと公衆電話っておかしくないか」

「やっぱりここ病院よ」

望恵がかざした光に「院内総合受付」の文字が照らされた。それと同時にいままでのかび臭い匂いが急に消毒剤の匂いに変わった。

「何この匂い！」と良子

「どうした」と孝広

「病院の匂い・・・」と望恵

「病院の匂い？」と悟

その病院の匂いはすぐに退いていき元のかび臭い匂いに戻った。

「あっあれ・・・」と良子

「なんだ」と孝広

「いま一瞬病院の消毒の匂いがしたのよ」と望恵

「ま・・・まさか・・・」と悟

四人の背筋に悪寒が走り夏だというのに寒くなる。

「俺はわからなかったぜ」と孝広

「俺もだ」と悟

「私たちにはしたのよ」と良子に望恵

四人は恐怖に怯え動けなくなった。

「やっぱり帰りましょうよ」

望恵が体をくねらせ、ねだった。・・・つづく

第二章・種の絶滅（4）

「これ何かしら……。こっちにも」

良子が不自然なものを見つけた。

その受付カウンターの両側の壁には暗がりでも一見にして分かる何かをコンクリートで塗りふさいだ跡があった。

「この奥にも何かあるんだ」

「向こうにも2つ……。全部で4つある」

望恵は三人の後ろで震えていた。

「壊してみようぜ」

悟が背中に背負ったリュックからハンマーを取り出した。

「100%崇られるわよ」

良子がそう言っている間に悟はハンマーを振りかざしふさがれた1つの壁を崩していった。やはり中は空洞なのかすぐに白い粉煙をあげぼろぼろと崩れていった。大広間にとてつもない音が響きわたる。

「おいやめろよ！」

「すごいほこりよ！」

「もうひといきだ」

悟の額からは大粒の汗がたれ落ちている。いままで鳴っていた騒音がさっーと退いていく。ぽっかりと開いた穴からは暗黒の闇が広がっていた。三人はその闇に釘付けになった。

「この向こうに何があるんだ」

孝広が懐中電灯を照らしたが光が届かない。

「結構奥が広そうね」

良子が目を見開いた。

「何かいそうだな」

悟は力を出し尽くし肩で息をしていた。

「ちよっと……」

後ろに立っていた望恵が小さな声をあげた。また消毒剤の匂いが広

がる。三人は気づいていない。

「ちよっとつてば・・・」

望恵は何か得体の知れない気配を感じていた。消毒剤の匂いが腐敗した腐った匂いに変わる。三人はまだ気づかず穴の向こうに広がる闇を見ている。

「何かいる！」

「えっ・・・」

「何か動いたような気がしたんだよ」

「ねー！ちよっとー！」

望恵の声がようやく届き三人は振り返った。

望恵は恐怖に身をゆだね全身を振るわせていた。そのひとつは望恵の間近にいた。大広間のいたるところから集団で集まってくる。それらはふらふらとおぼつかない足どりでしかし確実に四人に近づいてきた。振り向いた三人は腐敗した匂いと恐怖に駆られ声も出ず動けなくなっていた。その瞬間・・・。望恵の首が飛んだ・・・。三人の顔が青ざめた。しがみつき体を震え上がらせる。目の前で望恵が死んだ。望恵の硬直した首のない体だけが目の前で立っている。腰を抜かす三人にそれは徐々に周りを囲み間隔を狭めていった。

「きゃーー！」

「うるっさいわね。耳元で大きな声たてないで！」・・・つづく

第二章・種の絶滅(5)

良子はハンドルを強く握り締めた。

「それからどうなったの」

望恵は怖いもの聞きたさだ。後部座席には聡子が耳をふさぎ目だけは見開いている。

「さあ・・・行方不明・・・らしいよ」

良子と望恵、聡子の三人は女だけの温泉旅行で車を走らせていた。最初は流行の音楽を楽しんでいたが、ひょんなことから怪談話に変わっていた。

「それって本当なの・・・」

聡子が後ろから細く聞いてきた。

「嘘に決まってるでしょ。噂話、都市伝説よ。・・・そうなんですよ・・・」

望恵が良子に聞いた。

「怖がっていたくせに。私も聞いた話でどうか分からないわ」

車は夏の日差しが強い田舎道を走っていた。聡子は何気に窓を開けた。同時に勢いよく湿気じみた熱い風とうるさいくらいの蝉の鳴き声が車内に入ってきた。

「何やってんのよ！早く閉めなさいよ！」

望恵が怒鳴った。冷房で冷めきった車内が一挙にサウナに変わる。

良子がエアコンのボリウムを強めた。

「どころでなぜ私の首が刎ねられたわけ」

望恵がいやみっぽく良子に尋ねた。

「それは話のなりゆきで・・・」

「私たち三人が登場しているのは分かるけど、孝広って誰よ」

望恵が続けて尋ねた。

「さあ・・・想像上の人物・・・？」

良子がごまかした。

「ねえ・・・」

聡子がまたか細く前の二人に問いかけた。良子と望恵は話で出てきた男のことで騒いでいる。

「ねえ・・・って・・・」

前の二人はまだ気づいていない。

「ねー！ちよっとー！」

良子と望恵はようやく気づき、望恵が振り返り良子はルームミラーから聡子を窺った。

「何よ！」

聡子は窓を眺めていた。

「いまのお地藏さん2回目よ。同じところ走ってるんじゃない・・・」

「そういえば・・・」

良子がまじまじと景色を眺めた。

「だからナビ付にしたらよかったじゃない！」

「無いほうが安いっていったのあんたでしょ！」

良子と望恵がレンタカーのことで言い争いを始めた。

「あつ、また。これで3回目よ」

聡子が窓から流れる地藏を見て言ったが二人はそれどころではない。

「あつ、また。もう何回同じところ走ってるのよ！早く温泉は入りたいのに！」

聡子の大きな声に良子は急ブレーキをかけた。

「地図みましょ」・・・つづく

第二章・種の絶滅（6）

良子が地図を見て探している間、望恵は携帯電話で旅館に電話したが圏外になっていた。聡子は静かに窓から地蔵を相手ににらめっこしている。

「分かったわ。その先を曲がって細い路地に入るのよ」

「大丈夫？ 方向音痴なんだから。なんだか乗り物酔いしてきたわ」
望恵がまたいやみっぽく言った。

「こんどこそ大丈夫よ」

良子がアクセルを踏んだ。聡子の顔はにらめっこのままで車は動き出した。すこし走り曲がったところで細い山道に入った。その目の前に小さなトンネルが口を開いていた。青いこけが入り口の周りを多い尽くし長い間車の通行が無さそうな古ぼけたトンネルだった。良子は別に何も思わず突入した。なかは真っ暗で車一台分の道幅しかない。また舗装された道路ではないので揺れが激しい。表面は山肌がむき出しである。

「すごいわね・・・」

良子は車のライトを上向きにした。

トンネルは意外と長かった。なかなか出口が見えない。

「こんなところでとまらないですよ！」

「変なこと言わないで！ 私だって早く出たいんだから」

良子は望恵に念押しされヒステリックな口調になった。聡子は目を大きく開きびくびくしている。三人が不安になっているとようやく出口が見えてきた。

「見えてきたわ。ようやくね」

三人は不安な時間から抜け出し心からほっとした。しかし・・・それもつかの間。トンネルを出ても外は真っ暗だった。良子とはっさにブレーキを踏んだ。

「いままで明るかったよね・・・」

良子はハンドルを握ったまま体が固まっている。

「まだお昼過ぎのはずよ・・・」

望恵は腕時計の時間を確かめた。

「また道に迷ったの・・・」

聡子のか細い声で問いかけた。

そこは夜だった。寂しい山のなかの夜の世界だった。三人の頭のなかは混乱していた。・・・つづく

第二章・種の絶滅（7）

「いったいどうなっているのよ！」

「ここはどこなの・・・」

「どうでもいいからはいくもどきましょうよ！」

狭い車の中は三人の叫び声で共鳴していた。パニック状態になっていた三人だが聡子があとの二人より先に冷静を取り戻し元来た道を振り返った。そこにはさっき通ったトンネルは跡形もなく消えていた。いち早くそのことを知った聡子は震えながら涙を流した。

「もう一度戻ってさっきのトンネルからやり直せばいいのよ」

良子がそう言ってバックにレバーを入れ後ろを振り返った。そこには聡子の後姿と何もない夜の山の景色が広がっていた。

「どうなっているのよ・・・」

良子は困惑して肩の力が抜けどうすることも出来ない苦悩を感じた。その時、放心している良子の腕が横から引っ張られた。

「ちょ・・・ちよっと・・・」

隣の望恵が震えながらフロントガラスを指差し遠くを見たまま良子の腕を引っ張っていた。放心状態の良子の視線はその指差す方向をゆっくり追っていった。そしてそれを目にした途端、急に我に返った。そこには良子が今さっき話した怪談話に登場した廃墟の建物が目の前にあった。

「もう一度戻りましょう！」

「どうやって戻るのよ！」

「とにかくここから逃げるのよ！」

車は勢いよくバックした。その拍子に何かにぶつかったがお構いなしに逆方向にハンドルをきり猛スピードで走り出した。三人を乗せた車以外は誰もいない真っ暗な山道を車のライトを上向きに切り替えたまま走り続けた。三人とも今起こっている出来事から逃れることに必死なのか無言で体は固まっていた。

「ねっ！この道であっているの」

望恵が前を向いたまま小声で良子に問いかけた。体はまだ硬直している。

「分からないわよ！」

良子は長く続く真っ暗な山道を目をそらすことなく少し怒り口調で答えた。どこに続いているか分からない真直ぐな山道が永遠と延びている。今はただひたすら走り続けるしかなかった。

聡子も後部座席の真ん中の位置に座りライトに照らし出される前方を見ていた。後ろを振り向くのが怖かった。三人とも前だけを見ていた。

しかし聡子は何気に横の窓の景色をゆっくり視線を変え伺った。ぎよっとして目を見開いた。もう一度即座に前を見た。そしてもう一度恐々と確かめるように横の窓を見た。前の二人は真直ぐ前を向いたままそれに気づいてはいない。

「おねえちゃん・・・」

聡子は泣きそうな声で前の二人に問いかけた。

「何よ！どうしたの」

望恵は前を向いたまま聞き返した。

「この車動いてない・・・」・・・つづく

第二章・種の絶滅（8）

「えっ！何言ってるのよ！走っているでしょ！」

良子は目を見開き前を向いたまま大声で言った。

「聡子が言うとおりに動いていないわ・・・」

望恵が視線を横の景色に向け呆然と言った。

車はどこに続いているか分からない一本道をやみくもに走っている。猛スピードで回転するタイヤが土石を蹴散らしている。確かに車は前に進み走っている。しかしそれは前方のフロント硝子に映る景色だけで後の周りの景色は止まったままだった。良子がスピードメーターに目をおろすと0のままエンジンは回転していなかった。

それに気づいた瞬間、車のライトは消え闇に包まれた。今まで走っていたという感覚はまったくの錯覚だったのだろうか。

「私たちどうなっちゃうの・・・」

「もう嫌よここから出して！」

そこは廃墟の建物が行く手をさえぎる元いた場所だった。恐ろしいほどの静寂と満月の月の光だけが三人の乗った車と廃墟の建物を照らし出していた。

「もうここから戻れないの・・・」

聡子が悲しげに聞いてきた。

「わからないわ・・・。なにもかも・・・」

良子がまた放心状態でつぶやいた。

「ちょっと・・・何、この匂い・・・」

望恵がそれに気づいた。エアコンの通風孔から入ってきているようだ。

「病院の匂い・・・」

森がざわめいた。それらは三人が気づかぬうちにふらふらとおぼつかない足どりで森のいたるところから車に近づいてくる。

車の脇には先ほど聡子とにらめっこをしていた地蔵が倒れ三人を眺

めている。

満月の月の光は赤く降り注ぎこれから起こる惨劇を静かに照らしていた。

「きゃー！」

「それでその怪談話の結末はどうなったの・・・」

「私も詳しくは知らないんだけど、その三人って言うのは珍しい一卵性の三姉妹で顔は三人とも同じだったの。・・・で誰か一人はその廃墟に吸い込まれるように入っちゃって、もう一人は行方不明、最後の一人は気がおかしくなってどこかの病院にいるらしいよ・・・」

「恐わーい。それって本当の話なの・・・」

「「嘘に決まってるでしょ。噂話、都市伝説よ」・・・第二章終わり

第二章・種の絶滅（8）（後書き）

誰しもが一度は興味を持つ未知の世界、恐怖を感じながらその好奇心を駆り立てる。ただ空想のお話で止まらず自分自身に置き換えたらどうだろう。「次は我が身！」想像力を膨らませ、話の展開に没頭し、登場人物と一緒に物語のなかに同化していく。次回もこの部屋でお待ちしております。

第三章・アンドロイドたちの夜(1) (前書き)

喧騒とした慌しい日常よりほんの少しだけ現実を忘れ、自由に想像を膨らませ空想の部屋へお越し下さい。お付き合いいただけるひとときの間、あなた様はどのような夢を見ていただけますでしょうか。

第三章・アンドロイドたちの夜(1)

それは、砂時計の砂が下に落ち時を刻むように静かに正確に動いていた。

それは、私たちの知らない場所にありながらすぐ側で進化していた。

それは、誰しもが皆気づくことなく確実に広がっていた。

それは、皆が注意していれば防げたかもしれない。しかし私たちの感覚は麻痺されそれを見過ごしてしまった。

もう何をするにも遅すぎる。止めることなどではしない。

それは、着実に一寸の狂いも無く私たちとともに動いている。

意識を失っていたようだ。気づくとそこは真っ暗な場所だった。かすんだ目を擦り、朦朧とした意識をはっきりさせようと眉間をおさえた。何か様子がおかしい。傾いている。その斜めに傾いた壁際に倒れこんでいた。次第に暗闇に目が慣れてきた。

「こ、これは・・・、どういうことだ・・・」

目の前に広がる信じがたい状況に顔がこわばった。そこには割れた窓ガラスが粉々に散乱し、砕け散った窓からはひとしきり横なぶりの激しい雨が入り込んでいた。雷光が周りを照らし出す。そこは紛れもなくいつもの新幹線の車両のなかだった。

「どうしたことだ・・・」

頭のなかが混乱している。今いる自分の状況が飲み込めない。呆然と壁に手を付きふらふらと立ち上がった。ばりばりとガラスを踏む嫌な音が足元から聞こえてくる。

「列車事故・・・」

最悪の言葉が脳裏をよぎった。他にこの状況から何を推測できるだろう。激しい雨が吹き込む割れた窓を見つめ高ぶった神経を抑えていた。斜めに傾いた体を支えていた足元に何か触れるものがある。

雷光に照らされたそこには、ガラスの破片が無数に突き刺さったあのウェイトレスの女が目を見開いたまま死んでいた。虚ろな眼差しで足元に倒れている女を見下ろした。何度も自分の命を狙い、そして奪っていった女が先に死んでいる。この女はいたい何者だったのだろう。車内に流れ込んだ濁流のような雨がその女の体をぬらしガラスの刺さった傷口から赤い血が尾を引き流れていた。

「山崎・・・」

足元の女を蹴飛ばし慌てて自分のいた座席へと急いだ。しかし傾いた車両と流れ込む雨が勢いよく水かさを増し足にまわり邪魔をする。座席の背もたれを杖に必死に前へと進んだ。雷鳴が轟き雷光が惨たらしい車内を照らし出す。雨は激しく叩きつけ行く手を拒む。他の乗客がいないこともなくようやく自分がいた座席にたどり着いた頃には雨水は胸元までできていた。

「山崎！」

そう叫んだとたんに足を滑らせ雨水の中に落ちてしまった。倒れた体を起こしたとき既に山崎の姿はなかった。雨水は怒涛のごとく人の背丈を越え天井いっぱいまで浸透していった。

「うっ・・・」

息をするのが精一杯になってきた。水かさはどんどん増すばかりである。不意に何かに足をとられ雨水の中に沈んでいった。よどんだ水のなか目を見開くとそこにはウェイトレスの女が妖しく微笑みながらガラスの破片が刺さった細い腕で自分の足首をきつく握っていた。恐怖のあまり叫んだ泡が大きく上がっていった。這い上がろうともがいたが暗い底へと引きずり込まれていった。

あとには一定の間隔に並んだ誰も座っていない座席が雨水につかり沈黙を守っていた。・・・つづく

第三章・アンドロイドたちの夜(2)

冷たい雫が頬にかかる。永い眠りから目が覚めるように瞼をゆっくり開いた。真っ暗な場所だということは分かるが視界がぼやけてはつきりもしない。そしてかなりの湿気が体に付着する。

「ここがあの世というところか・・・」

もう一度瞼を閉じた。また冷たい雫が頬にかかる。間をおいて今度は体の感覚が目覚めます。硬いベッドのようなものに横たわっているような感触。湿気とひんやりとした冷気が肌にあたる。かすかに息もしている。ここはまだあの世ではない。そう思った瞬間即座に目を見開いた。ぼやけた焦点をあわす。すると真っ暗な世界の向こうには長く伸びる鍾乳洞が広がっていた。またひとつ冷たい雫が落ちてくる。力を振り絞り硬くなった体をやつとのおもいで起こした。

「洞窟・・・」

ここがどこなのか頭のなかが渦巻いている。自分は誰だ・・・どこで何をしていた・・・。なぜここにいる・・・。まったく整理ができない。

そこへ小柄な背丈の人影が自分に近づいてきた。

「お気づきになられましたか・・・。隊長・・・」

その少女は確かにそう言った。歳はまだ十代、どこかで見た顔だ・・・。

「隊長・・・?」

「お体の具合どうですか・・・」

少女は淡々ときこちない様子で言葉を続けた。

「いいも、悪いも・・・。まだ頭がボーとしている・・・。経験はないが昏睡状態から目覚めた感じだ。それよりここはどこなんだ。

君は誰・・・」

虚ろな目で少女を見た。

「ここは私たちの家。アジトです。外の世界はすでにやつらに占領

されている」

私たち……。アジト……。占領……。疲労困憊した麻痺している脳細胞では何を言っているのか理解できない。まるで答えが見えないクイズのようだ。

「……で、君は誰」

もう一度少女に聞いた。この質問だと答えはすぐに分かるだろう。

「私はあなたに助けられた」

複雑に答えが返ってきた。……つづく

第三章・アンドロイドたちの夜(3)

「当社をお選びいただきありがとうございます。お客様は幸運でございます。当社では他社に比べ最新のテクノロジーを使い、理想のお子様を提供させていただきます。まっ、それが我が社の売りなんですけど！それではお手続きへ入らせていただきます」

「私たちはそんな時代に生まれた」
少女は遠くを見つめ語りだした。

「ご説明いたしますと現代医学の発展につれDNAが解明された今、ナノテクノロジー、ヒトゲノムなどの研究の発達により特許を取得すれば、私ども民間企業でも利用できるということです。まっ、難しい話は置いといてパソコンの前へどうぞ」

「私たちは生まれたのではなく造られた」
少女の目から一筋の涙が流れた。

「まずは外見。やはりぱつと見が大事です。お子様の理想の顔をサンプルをご覧いただき輪郭からご入力ください。幼児から大人に成長した顔がシュミレーションできます。次へに進んでIQですが、当社は基本的装備として誕生したときから有名大学卒までの学歴を脳にインプットさせていただいております。あとお客様希望でそれ以上の能力をご用意お付けいたします。最後に病気へのウィルス対策、いじめ、差別など悪影響を及ぼす思考、思想のカット、社会上困難と思われる性格、感情の削除は既にプログラム済みです。あとは区別のため男女どちらかお選びください。それで決定していただければ完璧なお子様のセッティングは終了でございます。次の段階はここでご入力いただきました情報をスーパーコンピューターに送

り込み、そこよりデジタル化されたDNAが巨大な試験管へと流れ、そこで一ヶ月間お子様が育っていきます。その経過も観察できますのでご安心を。初対面の日には五歳ごろまで成長した姿でお渡しさせていただきます。まっ、流れとしましてはこのような形でございます。それではご会計のほうへ・・・」

「しかし私たちは不良品だった」
少女は力強く拳を作った。

「お客様クレームは困ります。当社では5年間は保障期間で返品も承りますが、それを過ぎるとお客様の責任のうえで育てていただいております。当社といたしましてはもう管轄外で関わりのないことになります。そのことは最初の契約時にご署名いただいているはずですが・・・。まっ、細かいことを話しても仕方ございません。お困りの事でしたらなんとか対応させていただきます。お会計は少しお高くなりますが・・・」

「それで私たちは捨てられた」
少女は歯を食いしばった。・・・つづく

第三章・アンドロイドたちの夜(4)

大きく広がる鍾乳洞をぼんやり見つめ、まるで独り言のように喋る少女の話を板倉は目を閉じ聞いていた。体にたまった疲労をゆっくり回復させながらようやく自分の名前は思い出した。

静かになったので目を開き虚ろな視線を少女の屈んだ後姿に向けると彼女はうなだれ泣いていた。

「外の世界はどうなっているんだ」

板倉は静かに問いかけた。

「パソコンで人間を造りだす時代なんて馬鹿げてる。外の世界ではその不良品たちが感情もないロボット社会に暴動でも起こしているのか」

少女は涙で濡れた顔をあげた。

「不良品の人間は私たちを含めごく一部。社会は不良品とみなせばその場で反動分子とみなし、それを依頼した者とも処分させられてしまう。そんな味方のいない社会に向かって暴動なんて起こせないわ」

少女の目からはまた涙が溢れ出した。

「不良品呼ばわりしてるけどおじいちゃんの時代なら私たちは性格も感情もある普通の人間よ！無感情、無感覚すべてないもの主義が当たり前なのあの時代が狂っていたのよ！」

少女の声が大きくなった。

「あの時代……。過去の出来事か……。じゃ今ここにいるのはなんのためなんだ……」

「抵抗よ……」

少女は落ち着いた声で言った。

「そんな時代が何年も続いたわ。しかし侵略者が現れたの。感情を失った人間たちは何も出来ずたやすく侵略された。私たちは同志を集め、おじいちゃんの頃の本当の人間社会を取り戻すためにレジス

タンスを作りいま戦っているのよ」

また頭痛がしてきた。板倉は頭を押さえた。少女は板倉に背を向けたままでそれに気づいていない。

「どこの国が侵略しに来たんだ。いまの日本はどうなっている」
苦痛の顔にゆがみながら言った。

「日本・・・。国・・・。国なんてないわ。世界は1999年に一度滅んだのよ」

「なに・・・！いまなんて言った！」・・・つづく

第三章・アンドロイドたちの夜(5)

頭を抱え込みながら聞き返した。

「おじいちゃんから聞いた話。それから世界は統一され狂った時代になったのよ。おじいちゃんが何故か謝っていたわ、“次の世代に託せなかった”って」

少女はゆっくり振り返った。

「大丈夫！」

少女は板倉の症状に驚き、駆け寄って体に触れた。

「大丈夫だ。すぐに治まる。話を続けてくれ」

少女は板倉を介抱しながら話を続けた。

「統一された世界は今までにない完璧な社会を目指した。遺伝子を改良して自分たちの思いのまま動く新人類^{ミュータント}を造り出した。それが予想もしない侵略されるといふ悪い結果を生み出した。そしてすべての人間がやつらの家畜になっている。それが今よ」

「それでどうなった」

「無気力な人間たちだけの虚像の世界」

また意味の分からない答えが返ってきた。板倉は頭を抱えそう思った。

「それではお客様のお子様を回収させていただきます。お客様は何もする必要はございません。私たちの誘導で強要ではなく自発的に自らの意思で処理地に行くことになります。そこからはもう二度と帰られません。あとは自然に自滅していきますから問題もございません。まっ、少しお高く付きましたが当社なりのアフターサービスです」

「親という者たちの身勝手な意思で私たちは回収され不良品の墓場といわれるところに知らずのうちに送り込まれた」

少女は板倉の胸の上に顔を埋め話した。

「さっきから、私たちといっているが俺も不良品に含まれているのか」

板倉は少女の背中をさすってやった。

「分からない・・・。しかし隊長はその墓場から私を救ってくれた」

「俺はいつたい誰なんだ・・・」

「あなたは私たちレジスタンスの隊長。敵に捕まっていたのを救い出した」

「敵・・・。世界を侵略した相手か・・・。いつたい誰なんだ」

「誰ではなく、何・・・。それは宇宙から来た何か・・・。隊長をさらった敵は同じものとは限らない・・・」

板倉は思考能力が薄くなってきた。

「宇宙人・・・」

板倉は静かに深い眠りに落ちていった。・・・つづく

第三章・アンドロイドたちの夜(6)

目が覚めると少女の姿はなかった。眠った時間はほんの数時間だったが今回は悪夢から逃れたようだ。ぐっすり寝たようでだいぶ体は回復した。

横になったまま天井に垂れる大きな鍾乳洞を眺めながら、少女の言った言葉を頭のなかで繰り返し考えてみた。

「1999年に世界は滅び、新しい世界が生まれた。そして完璧な社会を作るために間違った政策が打ち出された。そこで造られた人間たちが構成する硝子のようにもろい社会構造。そこに宇宙人が侵略し世界を乗っ取った。・・・そして俺はパソコンで造られた新人類^{ネト}の出来損ない」

そんな荒唐無稽な話をすぐには信じられなかった。どう考えてもハリウッド映画だ。自分の頭のなかに残る記憶はまったく違う。・・・しかし・・・断片的にしか出てこない自分の存在と夢の中のもう一人の自分・・・これが誰かに作られた記憶だとすると無意識に社会に誘導され俺もまたその“墓場”に捨てられたのか・・・また何故俺は“敵”に捕まった。レジスタンスのリーダー・・・頭のなかで整理するつもりだったが余計に混乱してまとまりがつかなくなった。

頭を抱えているとそこへ今度は大きな人影が近づいてきた。

「お気づきになられましたか・・・隊長・・・」

その青年は確かにそう言った。歳はまだ十代、知らぬ顔だ。

「ああ、・・・ところで少女はどこに行った」

「少女・・・」

その青年は不思議な顔をした。

「高校生ぐらいの女の子だよ。いままでここにいたんだ」

その青年は困った顔をした。

「高校生・・・？ここには隊長と僕しか居ません。いままで私は隊長

の護衛で外で見張りをしておりましたが内に入った者はおりません。そして我々の仲間には女の子はおりません」

そうすると彼女はいったい誰だったんだ……。板倉はその青年にいままでの事をしゃべった。

「隊長は世界征服を企む組織に捕まっていたのです。私たちは脱出計画を練り念密な計算の上時間は掛かりましたが、潜入していた仲間とチームで昨日救出に成功し此処へお連れいたしました」

「世界征服……。潜入していた仲間というのは遠藤広子という女性か？」

「潜入後の名前は分かりませんが、美しく素敵な女性です。他の仲間と同様今もその基地で戦っています」

板倉の脳裏を遠藤広子の愛らしい面影がかすめた。

「借りを返す番だ。今度は俺が助けに行こう。今すぐに準備をしてくれ」

「お客様、当社の技術を利用されたいと……。それでは提携というかたちで取り組みさせていただきます。まっ、新しいプログラムは既に更新済みでございますから……。ところでお客様は政府の方でいらしゃいますか。当社は利益を重んじております。見返りが高ければ高いほどどんな人間でもお造りさせていただきます……。ご協力ありがとうございます」……。第三章おわり

第三章・アンドロイドたちの夜(6) (後書き)

誰しもが一度は興味を持つ未知の世界、恐怖を感じながらその好奇心を駆り立てる。ただ空想のお話で止まらず自分自身に置き換えたらどうだろう。「次は我が身!」想像力を膨らませ、話の展開に没頭し、登場人物と一緒に物語のなかに同化していく。次回もこの部屋でお待ちしております。

第四章・第三戦争始まる（1）（前書き）

喧騒とした慌しい日常よりほんの少しだけ現実を忘れ、自由に想像を膨らませ空想の部屋へお越し下さい。お付き合いいただけるひと
と
きの間、あなた様はどのような夢を見ていただけますでしょうか。

第四章・第三戦争始まる（1）

それは、徐々にしかも正確に私たちを蝕んでいった。

それは、気づいたときにはもう遅い。もう取り返しのつかない事態まで来ている。

支配はすでに始まっている……。

「いま、ここ日本にある宇宙開発センターより、いよいよ総合デジタル衛星の打ち上げが間近に迫っております。先端技術を駆使し日本で製造された世界に誇る最新衛星といっても過言ではないでしょう。しかし今まで幾度かに渡って反対派による抗議や妨害工作によりまして打ち上げが見送られ延期されておりました。今回はそれらの難題に屈せずほぼ強行に打ち上げが決定したと見ていいでしょう。この打ち上げは反対派の過激行動を避けマスコミにもつい先ほどまで伏せられており秘密裏に進められておりました。この打ち上げが成功すれば、テレビ放送は基よりパソコン、携帯電話、通信ゲームに至るまでありとあらゆる情報が美しく確実に、どんな場所でも何時でも我々の手にすぐに届くのです。この放送は衛星を通じて全世界中に緊急生中継しております！」

・・・数年前。

国際総合デジタル化が国際会議で決定され、通信衛星が打ち上げ目前となった今、その目的に疑問を持った男がいた。何故、その必要があるのか？急速に各国の国家予算の大部分を通信開発に費やす目的は何なのか？法律で定められる定義とは？一般には肩書きどおりの表面的な説明だけで、その裏には知られてはいけない“何か”が隠されているように思えた。

「それで博士の考えは・・・」

「真の目的は宇宙人との交信だと思う」

「宇宙人・・・!？」

「突拍子もない飛躍しすぎた発想だと思うかね？ ともない我々の現在の科学技術のほとんどは彼らのお蔭なんだよ」

「宇宙人の科学技術・・・??」

「よく雑誌やTVなどでタブロイド的に扱われているが、ほとんどはインチキでもごく一部真実が混じっている。しかし世間はそんなものは娯楽の見世物としてしか思っていない。それが奴らのプロパガンダなんだよ」

「奴らとは・・・？」

「よく、ほらそういった娯楽映画にも陰で暗躍する組織が出てくるだろう。影の・・・」

「政府・・・!」

「ご名答！ 奴らはすでに宇宙人と協力し科学技術を向上させた。というより盗んだんだな、これが。それははるか昔に宇宙船が墜落したことが発端だった」

「宇宙船！ UFOですか！」

「もちろん！ そしてその回収された宇宙船の未知なる科学技術をその国の政府は盗んだ。しかし墜落したのは1機だけではなかった。他の国にもおっ落ちてた訳だ」

「別の国・・・」

「そう、何ヶ国、何ヶ所と数月を掛け意外とたくさん落ちてたわけ。そんなことはつゆ知らずその国としては秘密にしておきたいから、隠ぺい工作を使い知らぬ存ぜぬを突き通した」

「しかし話が世に出回り世間の関心を引き、敵対国家であろうが手を結ばざるを得なくなった・・・」

「えらい！ そこでよりいっそう高度な科学発展を目指し世界が協力してデジタル時代という名目で裏では新たなる未知の技術を手に入れんがため、宇宙との通信に踏み切ったわけだ」

「通信手段も宇宙といった長距離だとアナログよりデジタルのほうが鮮明に電波に乗り相手に届けやすい」

「頭いいねえ。君、どこの記者」

「いやだなあ、最初に挨拶しましたでしょ。フリージャーナリストの山崎渉です」・・・つづく

第四章・第三戦争始まる（2）

「電波物理工学の望月博士。あんな人の意見を参考にしたのか？」最初にこの記事を書りにいったのは、ゴシップ、スキャンダルなどで有名な雑誌出版社。正統派の出版社に持っていっても端から相手にされず、そっぽを向かれるのが落ちだ。博士の言葉にもあったように数多くのインチキ記事があったとしてもその内ひとつは真実がある。その言葉を信じたものの第一声がこれだ。

「あの人はなあ。胡散臭い人で有名なんだよ。学会からも煙たがられている。たぶん君はこういう記事を書くのが初めてだろうから知らないかもしれないが、あの人の言った記事は手垢が付くくらい出回っているんだよ。他、持っていきな。他も無理だとは思うけどね」「そんなあ。しかしこれが事実としたらえらいことですよ！」

「あのねえ、冷静に考えれば分かることだろ。そのありがたいご意見でも肝心なところが抜けてないかい。うちも偉そうなことは言えないけれど、そういうのに陶醉する人っているのよ。まあ、うちはそれを売りにしているけどね」

頭ごなしに追い出され、ふらふらと歩きながら冷静に考えてみた。そういわれると所々説得力に欠ける。「もう一度会いに行くか・・」とも考えたが同じ話の上塗りだ。この博士の話を補足するよう別の人の意見も参照しよう。

「宇宙人との交信？言語道断だね。あの人が言いそうなことだ」

「では、教授はどのようにお考えで・・」

「私かね。私は管理社会の形成だと思う」

「管理社会・・！？」

「生まれたときから体の一部にバーコードを付けられ、登録されファイルされる。それはすべてコンピューターが管理して衛星からは監視される。そう、打ち上げ予定のデジタル衛星こそがまさしくそ

れだよ」

「それは誰が何のために……？」

「よく聞いてくれた。ハリウッドの近未来をとりげたSF映画で出てくるだろう。影の……」

「政府ですか……」

「正解！ 奴らがだね……」

「で、今度は社会理論の豊島教授に聞いてみたって……。君も人を見る目のない人だねえ」

もう一度デスクに持っていった。

「やはり博士と同じ種類の人ですか……」

「あっ、見る目あるじゃないの」

「話の中で影の政府が出てきたところから分かりました」

「まあこういう話は結局は昔からある根も葉もないゴシップネタなんだよ。そういうのに興味のある人種が多いから俺たちは食っていないんだけどね。なんなら君の努力に免じてこの記事買ってあげようか。もうちょっと面白くして」……つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4959s/>

New Age Beginning

2011年11月8日23時15分発行